ベルクソンにおける宗教理論の宗教学史的意義

武田武麿

一　アンリ・ベルクソン(Henri Bergson, 1859–1941)は、『道徳と宗教の二源泉』(*Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932)の第二章「静的宗教」(la religion statique)において、原初的宗教理論を展開している。宗教的諸表象は、何よりもまず生きんとする人間の営為においての、根本的な機能的現象と解釈されている。その「生の根本的要請」(exigences fondamentales de la vie)が、「知性」と「社会性」の二つの人間的特徴を通して、宗教的なるものを生み出してきたと考えられているのである。

生命現象は、本来的には常に無限の可能性をもって、自己を創造してゆくのである。人間の知性にしても、社会性にしても、生きんとする本能的働きにおいてみらるべきなのであり、宗教的働きも、同様に創造的な生命現象として開放さるべきである。ベルクソンが、宗教を「静的」とわざわざ区別して宗教を定義するに際しては、その宗教の機能が、生命を維持しようとするために、かえって人間を自己愛(ナルシスム)に向わしめ、社会を閉鎖的、排他的にする方向で働くことを明らかにする。ベルクソンの宗教理論は、いずれにしても、生命現象たる自然の意図に則した筋目に沿って、宗教の諸現象を解釈しようとする立場である。彼は宗教的諸表象を、生命の創造的現象という首尾一貫した組織(システム)によって、置き直してみようとしている。

このような宗教の理論的解釈は、一面では、合理的理解の立場たるそれまでの宗教理論、つまり近代学的な観察と推論に立脚した解釈が、宗教にみられる「非合理性」(absurdité)を置き去りにしていることへの批判に立ってもいるのである。『源泉』の第二章は、その論及から始められている。ベルクソンは、レヴィ・ブルュール(Lucien Lévy-Bruhl, 1857–1939)の「原始的心性」と、デュルケーム(Emile Durkheim, 1858–1917)の「集合的心性」を問題にする。その詳細については、すでに論じたところである。(『大谷学報』第六十一巻第三号「ベルクソンにおける静的宗教の一考察」)ただここで注目しておきたいことは、この二つの心性は単なる偶然に取り上げられたのでなく、合理的な宗教研究の全体を視野においての、基本的な批判に立っているということである。それら二つの心性の宗教学的な系譜は、プリミティヴな人間の心性でも、かつての人類一般の心性だったとする論理化の代表的なものということである。宗教にみられる非合理な側面は、結局はこれらの心性に由来するものだと考えてきた。それが、ある限定された種類に属する人間の思考様式として、他の思考様式相互の関連を決定づける範囲内で論じられているならば、問題はないのである。そうでなくて、まだ文明化しない単純で素朴な思考においても、人間の一般的な思惟として、プリミティヴな社会に事実確認されるものとしている。

ベルクソンは、はなはだしく理性に反したそのような宗教的表象を生み出す心性が、合理的思考によって、いったいなぜ承認されてきたのか、そこが理解されないと述べるのである。プリミティヴな人間とはいえ、いやしくも人間の思惟に、極めて非合理な

行動の余地を容認することは、合理的探究からすれば不可解といわねばならないのである。

二 ベルクソンは、静的宗教を、生きんとする人間存在の自然の意図による、防禦的な反作用と定義する。この宗教理論の展開は、以上の如く、同時に原初的な宗教から一般理論を導き出してきたそれまでの宗教研究に対する、批判的論述とも見ることができるのである。その批判の論点をまとめると、次の四つになろう。(1)起源論による本質論的理解の問題。(2)宗教の多様性における組織的な基本法則の問題。(3)西欧中心主義と進化主義的観点の問題。(4)資料への偏重の問題。

指摘されうるこれらの問題は、宗教研究の近代学的な展開において、すでにその出発点から内在していた課題ともいえよう。したがって、ベルクソンがそれらの問題へ与えた解決の方向性は、宗教学史的にも、一つの考慮すべき意義をもつといってよい。

宗教研究の動向を、歴史的に概観したものは、すでに少なくない。しかしいずれにしても、まとまった一つの流れでとらえることの困難さを示している。宗教を対象とする研究分野には、神学的研究、宗教哲学的研究、宗教史学的研究、それと宗教学的研究があり、そしてそのそれぞれが、方法論的に、思想史学的、言語学的、社会学的、心理学的、人類学的等々と入り組んだかたちで展開してきた様相をもっているためである。このような複雑な展開において、宗教のいわゆる近代学的な研究の歴史を見ていくとき、大きな動向として、私は三つの時代に区分できると思っている。これは、ワッハ(Joachim Wach, 1898–1955)が『諸宗教の比較研究』(*The Comparative Study of Religions*, 1958)において述べている区分に応ずるものである。それぞれの動向の特徴を表わしてもいる次のような呼び方を、ここではしておきたい。(1) scientific study of religions、(2) comparative study of religions、(3) historical study of religions、である。

それぞれの研究の時代的特性を説明することは、別の機会にゆずらねばならないが、神話学を中心として、キリスト教以外の宗教を理解しようと、純粋なひたむきな要求から出発した初期の、資料にもとづく諸宗教の研究から、より一層文献学的関心のたかまりによる諸宗教の比較研究へと進んだ(1)から(2)への経過に、ここでは注目しておこう。特に(2)の時期は、近代学としての実証主義的方法(文献学的、歴史的、批判的研究)によって、輝かしい成果を生み出してきたと同時に、それなりに克服せねばならない問題も孕んできた。したがって(3)の時代は、それらの問題を、克服さるべき課題として、研究そのものの在り方に、内在化させて展開してきていると見ることができるのである。

ここにおいて、ベルクソンの特にその原初的宗教理論が、最近の宗教学の課題克服の方向性を示唆している意義において、評価されてよい意味もそこにあるのである。

三 最近の宗教研究、特に近代学的な合理論による宗教研究の、方法論的課題を、どのように見ておけばよいであろうか。これも非常に大きな問題であるため、ここでは図式的にならざるを得ないが、次のようにまとめることができよう。大きく見て、三つの課題があると思われる。(1)分野規定の問題、(2)方法論的問題、(3)世俗化の問題、である。(1)は、いわゆる「宗教学」は、キリスト教神学との拮抗の下に、宗教哲学、宗教史とも相異するものとして、自律的学問(autonomous discipline)たるものとして、その分野確立に努めてきた。おおよその理解は、宗教学とは、客観的

立場から、科学的な研究によって、宗教を類型化し、法則設定(nomothetic)して、体系化を成就する学問分野と考えられている。この自己規定そのものが、すぐ次の方法論的課題を生み出してくる。それも三つの方向から考えられねばならない。まず(i)方法論的多様化の様相をどう見るかである。学的分野の規定では、排他的に他の分野を削除しながら、研究の方法や、理論形成においては、多くの分野に負っている点である。言語学や、社会学、民族学、人類学、心理学等々の理論に依存してきたことは、説明するまでもないことである。(ii)として考えられる方法論的課題は、文化理論的な立場からの問題である。それは宗教理論の性格が、発展史観的見解に基礎づけられたものが多いところからきている。その一つは、文明論的見解の問題であり、宗教現象を、プリミティヴな在り方に求めて、単純で素朴な表象において、宗教とは何かという本質的な意味を明らかにしようとしたところに指摘される。つまり、原初的追求が、同時に本質的見解を明かすものと考えられたところにある。しかもそこには、進化理論の形式的な適応も考えられないわけでもない。人間の生活圏に関わる在り方と関連して、低次宗教から高次宗教へ、未開宗教から発達宗教へ、原始宗教から世界宗教へと、進化主義的認識による諸段階の位置づけがなされている。方法論的課題の(iii)として、価値中立的客観化の問題がある。宗教学が、研究において science の特権を力のかぎり自分のものにしようとしてきたことが、近代の科学主義的傾向の全般的な危機と相まって、宗教を対象にするということで、一層問題化せずにはおかない。宗教とは何かと問うその問自体に、観察者の立場に立って、客観的に分析し、宗教一般の理念を解明する困難さが、方法論の基礎的な哲学の問題として考えざるを得なくしている。そこで、宗教研究の第三の大きな課題である、世俗化の問題がある。現代の思想的状況のうちで、「宗教」の位置づけをどう考えるかである。宗教学的には「脱聖化」(desacralization)ともいわれ、伝統的な諸宗教が、歴史的、思想的に帰結したニヒリズムの諸状況にあって、尚、宗教を対象とする学的立場が、それらの諸状況を内在化して確立されるかどうかの問題である。

以上の如き宗教学の近代学的課題に対して、とりあえず今回の主題としたベルクソンの原初的宗教理論は、当初に提起した批判の論点から考えて、次のように、その課題克服の方向性を示唆するものと結論されよう。

(1)宗教は生の根本的要請たる機能において考えらるべきであり、そういう生命現象からの宗教の起源論こそが、宗教とは何かという本質論に関する適切な論議への地平を開く。

(2)宗教学によって明らかにされた宗教的表象の多様な様相のうちに、生命現象たる自然の筋目に沿って本質的機能を検討していけば、首尾一貫した組織として、いかにその機能が適応しているかが示される。

(3)あらゆる時代と社会の、未開と発達の宗教を、同時に説明する視点を持つことになり、独善的な西欧中心主義や形式的な進化主義的視点の誤まりが批判される。

(4)人間の宗教的諸表象は、形態的にも、歴史的にも、部分や断片のみで判断することなく、常に全体像の把握からなされるものである。